

既読無視と未読無視：

LINE の既読表示機能に関する基礎調査

加藤由樹

Ignoring read and unread text messages:

Basic survey on the LINE messaging application's read receipt function

Yuuki KATO

This study was a basic survey that focused mainly on the read receipt function (a function that notifies the message sender that their message has been read) of LINE, a commonly used smartphone-based text-messaging application in Japan. A total of 123 LINE-using students were asked to freely describe the positive and negative points related to display of read receipts. Students were also asked to answer which condition was more unpleasant—when there was no response to a text message that the other party had not yet read, or when there was no response to a text message that they had read—and freely describe the reasons for their response. These survey results will hopefully be of use as a resource for future research regarding LINE.

Keywords: social networking service (SNS), smartphone, read status, LINE, text messaging

1. はじめに

電子メール等のコンピュータを使ったコミュニケーションが一般に普及した頃は、これらのコミュニケーションツールは主にパソコンで利用されていた。その後、携帯電話の普及とともに、1990年代の後半には携帯電話でショートメッセージサービス (SMS) が始まり、更に携帯電話でインターネットが利用できるようになったことで、通話だけでなく様々なコミュニケーションツールが携帯電話でも利用されるようになった。そして2007年のアップル社のiPhoneの販売以降(日本国内では2008年に販売開始)、現在までスマートフォンの普及率は急速に高まり続けている。総務省による「平成27年版情報通信白書」(総務省, 2015)によれば、2014年の時点で日本におけるスマートフォンの世帯保有率は全体で64.7%、世帯主が20代では94.5%、30代では92.4%であった。特に若い世代に利用される携帯端末において、従来の携帯電話(フィーチャーフォン)に代わってスマートフォンが大部分を占めるようになってきたといえる。スマートフォンでは従来の電子メール等のコミュニケーションツールに加えて、TwitterやFacebook等のソーシャルネットワーキングサービス(SNS)も日常のコミュニケーションとして利用されるようになった。それまでSNSは主にパソコンで利用されてきたが、スマートフォン用のアプリケーションの登場によってそれらのSNSがより手軽に使えるようになったためである。またスマートフォンを使えば、“その場”でメッセージをSNSに投稿できるだけでなく、写真や動画の撮影から投稿までの一連の作業をスマートフォンだけでできる。すなわちスマートフォンとSNSの親和性が高いことが、スマートフォンとSNSのどちらの利用率の急増にも繋がったといえる。このような状況下で、従来の携帯メール(SMSも含む)に代わるコミュニケーションツールとして、特に若年層を中心に利用されているSNSがLINEである。LINEとはインターネットを利用した無料通

話やトークと呼ばれるインスタントメッセージを利用できるコミュニケーションアプリである。このインスタントメッセージの機能が、携帯メールに代わるテキストベースのコミュニケーションツールになってきた。

東京都立の高等学校に通う高校生を対象に 2014 年に総務省によって実施された調査の結果をまとめた「高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査報告書」(総務省, 2014)によれば、スマートフォンを利用する高校生の割合は 84.5%であり、スマートフォンを持ち始めてからインターネットの利用時間が増えたと回答した高校生は 62.9%であった(総務省, 2014)。また SNS を利用する高校生は 91.0%であり、サービス別では LINE が 85.5%と最も利用されていて、続いて Twitter (66.9%) が多く利用されていた(総務省, 2014)。利用者の一日当たりの平均利用時間が最も長いのは LINE で 80.9 分、続いて Twitter で 78.6 分であった(総務省, 2014)。そして 80.1%の利用者が就寝前に SNS を利用していると回答した(総務省, 2014)。更にスマートフォンを使用し始めたことで日常生活において減った活動時間について、40.7%の高校生が睡眠時間を挙げ、34.1%の高校生が勉強の時間を挙げた(総務省, 2014)。この報告書ではインターネット依存の主な原因としてインターネットの長時間利用に言及しているが、現代の若年層によるスマートフォンを用いたインターネット利用の主な目的は SNS であると考えられる。SNS では会話のようなやりとりをテキストベースのコミュニケーションで行うことができる一方で、対面による会話のようにお互いの表情や状況等の非言語情報が得られないために、お互いにそろそろやりとりを終えたいと思ってもなかなかやりとりを終わらせることが難しくなる。このため長時間にわたって SNS を介した会話を続けることになり、就寝時間や勉強の時間に負の影響を及ぼすと考えられる。実生活への悪影響が出るのが依存の一つの指標となることは多くの関連研究で指摘されている(岡田, 2014)。

例えば電子メールでは、手紙のように投函や配達等にかかる地理的な時間等を考慮せずに、簡単な操作だけで瞬時にメッセージを送ることができる。電子メールによってメッセージのやりとりのスピードが劇的に速くなった。しかし従来のパソコンを使った電子メールでは、メッセージの送信元も受信先もパソコンであり、送信者はパソコンの前に座ってメッセージを送る必要があり、受信者はパソコンの電源を入れてメールを起動してからメッセージを受け取ることになる。すなわちやりとりのスピードが速いとはいえ、電子メールは非同期のコミュニケーションである。リアルタイムでいつでもどこでもやりとりが可能になったわけではない(Tyler & Tang, 2003)。しかし携帯電話やスマートフォンではそれらを身に付けている限り、通話だけでなく電子メール等のテキストベースのコミュニケーションでも、同期的にやりとりをすることができる。そのためそれまでは非同期のメディアという認識で使われてきた電子メール等のコミュニケーションに、より速いやりとりが要求されるようになってきている。これは特に若い世代に顕著であり、例えばデジタルネイティブ(インターネットや電子メール、携帯電話等が周りにある環境で生まれ育った世代)である大学生を対象にして彼らの携帯コミュニケーションに関する捉え方を調査した Kato (2015)によれば、デジタルイミгранト(ICTの新しい技術やサービスが登場すると旧来のメディアにそれらを取り入れ取り替えながら使用して、徐々にそれらを習得していった世代)である年上からの携帯メールや LINE の返信が遅いことに違和感があると回答した大学生が多かった。また、携帯メールや Twitter 等のテキストベースのコミュニケーションで長く続くやりとりを終えるための工夫について大学生を対象にして調べた加藤ほか(2013)では、四割以上の大学生がなかなかやりとりが終わらなくて困った経験があると回答した。やりとりがなかなか終わらないのは、一方がメッセージを送信すればもう一方がすぐに返信し、それにまたすぐに返信するためであり、加えて、やりとりの途中で返信を止めれば相手から無視されたと思われるとお互いに考えるからである。結果として、深夜までやりとりを続けることになる(加藤ほか, 2013)。本来は非同期の特性を持つコミュニケーションが携帯電話やスマートフォン上で行われることで、より同期的なやりとりに近づいた。これはより効率的で便利な面もあるが、他方で利用者の心理

的な負担にもなっていると筆者は考えている。

携帯端末の普及に伴ってテキストベースのコミュニケーションにおいてもやりとりのスピードが求められるようになってきたことで、普段からメッセージの着信を気にしてしばしば携帯電話やスマートフォンの待ち受け画面を確認する若者が多い。このような状況を踏まえて筆者は共同研究者らと一緒に、授業中の大学生の携帯電話やスマートフォンの私的使用に関する調査を行ってきた。立野ほか(2012)の21名の大学生を対象にした調査で付带的に示された結果によると、「授業中に携帯電話やスマートフォンを操作する」と回答した大学生は52.4%で、「授業中の携帯電話やスマートフォンの操作を後ろめたく思わない」大学生が42.9%であった。大学生の授業中の携帯電話やスマートフォンの使用に焦点を絞った立野ほか(2013a)の調査では、立野らはコンピュータ教室での演習の授業において授業中に携帯電話やスマートフォンを机の上に置いていた20名の大学生に調査用紙を配付し、彼らに「携帯電話やスマートフォンを机の上に置いている理由」を自由記述で尋ね、「机の上に置いていることに対する罪悪感」の有無を二者択一で尋ねた。その結果、携帯電話やスマートフォンを机に出していた理由を「連絡のため」と回答した大学生が7名で最も多く、机の上に置くことに罪悪感が無いと回答した大学生が9名いたことが示された(立野ほか, 2013a)。また立野ほか(2013b)では、237名の大学生を対象にして「授業中に携帯電話やスマートフォンを机の上に置いた経験」の有無をアンケートで調査した。その結果、普段の授業で携帯電話やスマートフォンを机に出していると回答した大学生は67.9%を占め、それは携帯電話やスマートフォンの使用が禁止されている授業でも30.8%を占めたことが示された(立野ほか, 2013b)。フィーチャーフォンが普及した頃の授業中の大学生の携帯電話の使用は“机の下”で行われていて、すなわち教員の目をかすめて使用されていた(松下, 2007)。しかし、スマートフォンの普及に伴って授業中の大学生の私的使用の様子が変わってきたと筆者は感じている。スマートフォンは概して背面が平たく、画面をタッチする操作のため、私的使用の舞台がスマートフォンをより扱いやすい“机の上”に移ったように感じるのである。しかしスマートフォンの形状やデザインだけが起因となり、そもそも机下に隠された行為が机の上に引き出されたとはいえないが、少なくとも現在の日本の大学において授業中にスマートフォンを机の上に置いている大学生を見つけることがさして難しくないことはいえる。

上述の研究を経てKato and Kato(2016a)は授業中に携帯電話やスマートフォンを机の上に置いている大学生とそうでない大学生を比較するための研究を行った。これは女子大学の講義形式の授業において、授業中の携帯電話やスマートフォンの使用について大学生を対象にアンケートで尋ねた調査で、“今”(アンケート配付時で、授業の開始後およそ30分の時点)、携帯電話やスマートフォンを机の上に置いているかを聞く質問項目からアンケートが始まっていた。そしてこの分析は、携帯電話やスマートフォンを机の上に置いていた大学生とそうでなかった大学生に群分けをして両群の回答を比較する形で進められた。Kato and Kato(2016a)の結果は以下である。机の上に携帯電話やスマートフォンを置いていた大学生の割合は64.5%で、彼女らの方が携帯電話やスマートフォンを置いていなかった大学生よりも授業中に携帯電話やスマートフォンを使って電話や携帯メール、LINEの着信内容を確認したりそれに応対(返信等)したりする可能性が高く、更に授業中の携帯電話やスマートフォンの取り扱いを制限するルールが設定された場合に机の上に携帯電話やスマートフォンを置いていた大学生の方がより不安になることがわかった(Kato & Kato, 2016a)。また、大学生の授業中の携帯電話やスマートフォンを使ったコミュニケーションでは一般的にテキストベースのコミュニケーションが選ばれやすいが、携帯メールに比べてLINEがより使用される傾向にあることがわかった(Kato & Kato, 2016a)。授業中に携帯電話やスマートフォンを使って私用のコミュニケーションを行うことは本来の授業態度から外れた行為であるが、このような行為が生じる理由についてKato and Kato(2016a)は、携帯電話やスマートフォンのコミュニケーションでは同期のようなスピードのやりとりが求められていると多くの大学生が捉えていることが原因の一つと考察した。またKato and Kato(2016b)では、女子大学

の講義形式の授業において授業中に携帯電話やスマートフォンを机の上に置いていた大学生と置いていなかった大学生の携帯メールへの依存を携帯メール依存尺度 (Igarashi, et al., 2007; 吉田ほか, 2005) を用いて比較した。その結果、授業中に携帯電話やスマートフォンを机の上に置く大学生の方が依存度が高く、携帯メールや LINE のやりとりの相手からすぐにメッセージが届かないことでより寂しくなり不安になる傾向が見られた (Kato & Kato, 2016b)。授業中の携帯電話やスマートフォンの私的使用に関するこれらの先行研究の結果は、現代の特に若年層にとっては携帯コミュニケーションにおけるやりとりのスピードが極めて重要視されていることを示唆する。もちろんすべての若者に当てはまるわけではないが、携帯電話やスマートフォンで行われるやりとりでは非同期のコミュニケーションであっても迅速な対応が求められているという共有された認識が若者間にあると考えられる。

スマートフォンの普及に伴って若者間で主に利用されるテキストベースのコミュニケーションが叙上のように携帯メールから SNS の一つである LINE へ移った。LINE はインスタントメッセージングであり、リアルタイムにチャットをするためのアプリケーションである。そのため簡単な操作で速いやりとりが可能である。携帯メールと LINE のコミュニケーションを比較するために大学生を対象にして実施した調査では、やりとりのスピードについて利用者の多くが携帯メールよりも LINE の方が速いと答えた (加藤, 2013)。しかし携帯メールのように使用される LINE は非同期のテキストベースのコミュニケーションツールであり、やりとりのお互いがスマートフォンに向かうことのできる時間を決めてチャットのようにリアルタイムのコミュニケーションを行うツールとして利用されるわけではない。例えば入浴中や就寝中、また上述の例外はあるにしても一般的には授業中もやりとりはできない。余裕がある時間帯に対応できることこそが非同期のコミュニケーションの利点であり、通話のように相手の時間に割り込むことをしないメディアである。いくらやりとりのスピードが求められるとはいえ、またいくら現代の若者がデジタルネイティブとはいえ、すぐに対応をできないやりとりもある。メッセージを受け取ったとき、それを確認して内容を把握することはできてもメッセージの送信者へ返事を送ることまではできないこともある。従って送信者にとっては当然相手からの返信を長く待たなければならないこともある。LINE には受信者がメッセージを読んだことを送信者に知らせる“既読”の表示機能がある。そのため LINE のやりとりでは、相手からの返信を待つ時間だけでなく、既読が表示されるまでの未読状態 (相手がメッセージを読んでいないために既読表示がつかない状態) の時間も気にかかる送信者が少なくないと考えられる。“LINE 疲れ”と呼ばれる特に若年層の LINE 使用による心理的な負担がしばしば話題に挙がる。例えば送信者は、時間がたっても既読表示がつかなければ“未読無視”を、既読表示がついても返信がなければ“既読無視”を疑うかもしれない。他方、受信者の側では、メッセージを読めない状態が続いたときには送信者からそれを未読無視と勘違いされたり、読んでもすぐに返信をできないときには既読無視と勘違いされたりすることを心配するかもしれない。

以上のように LINE を使ったやりとりでは原則として速い対応が求められるが、送信者が受信者からの返信を待つことになる場合もありうる。そしてこの待ち時間には既読状態と未読状態の二段階の状態がある。更にこの待ち時間が返信を待つ側にとって非常に長かったり、返信がないまま新たなやりとりが始まったりすること等の理由で、このメッセージは無視されたと解釈されることがある。この無視には既読表示の有無によって既読無視と未読無視の二種類に分けられる。本研究では、スマートフォン上のやりとりのスピードに関わると考えられ、従来の携帯メールには存在しなかった LINE の既読機能に注目した。

2. 目的

本研究では、LINE が持つ“既読”表示機能に注目したアンケート調査を実施した。LINE 使用者である大学生 123 名に、LINE の既読表示に関する良い点と良くない点を自由記述で尋ねた。

また既読と未読のどちらの状態でも相手から返信がないとより不快かを、その理由も含めて自由記述で尋ねた。本研究の目的は、今後の LINE に関わる研究の基礎資料として役立つために、この調査で得られた回答を整理してまとめることである。

3. 方法

日本の首都圏の大学に在籍する大学生 123 名（男性 63 名、女性 60 名、平均年齢 18.89 歳、標準偏差 1.30、レンジ 18-28 歳）がこのアンケート調査に参加した。この調査は参加者各自が一台のデスクトップパソコンを使える情報処理教室で行われた。このアンケートの質問項目では、LINE の相手がメッセージを読んだことがわかる機能（既読表示機能）の良い点と良くない点を尋ねて、それぞれを参加者の LINE 利用経験に基づいて自由記述で回答するように求めた。続いて、LINE の既読無視と未読無視ではどちらがより不快であるかを二者択一で尋ねて、加えてその理由を自由記述で回答するように求めた。これらの質問項目を参加者各自が使用するパソコンの間にあるサイドモニターに提示して、それぞれの回答をワードプロセッサソフトウェアである Microsoft Word2010 のファイルにパソコンで書くように求めた。回答を終えた参加者はこの Word ファイルを共有フォルダに提出した。この調査は 2015 年 10 月に行われた。

4. 結果

この調査で得られた自由記述の回答を、筆者及び LINE やテキストコミュニケーションに関する研究者二人が共同で、意味・内容に基づいて分類した。本研究と同様に LINE に注目した先行研究に岡本・石崎（2015）がある。岡本らは LINE を利用する大学生を対象にして既読無視が彼らにどのように受け止められているかを自由記述のアンケートを用いて調査し、その結果をまとめた。岡本らは自由記述の回答を大きなクラスターで分類しているため、利用者の具体的な回答をイメージしにくい。一方、本研究の目的は今後の LINE 研究の参考となる基礎資料を示すことにあるため、調査参加者の回答を意味・内容によってまとめる作業を最小限にとどめて、可能な限り具体的な回答を本論文では記したいと考えた。従ってこの分類作業では、まず回答を大きなグループに分けて、その後それぞれのグループに分類された回答を、使用されているキーワードとなる語句が同じで同様の意味で用いられている回答ごとにまとめる程度にとどめた。

表 1 は、LINE の相手がメッセージを読んだことがわかる機能（既読表示機能）の良い点について、この調査の参加者が挙げた自由記述の回答をまとめた結果である。なお自由記述の回答は一人の参加者が書いた回答でも内容によって複数に分けられる場合がある。この質問に対する全回答数は 202 であった。表中で上下の罫線に挟まれた中央揃えの項目（例えば「送信者側（既読を待つ側）の既読の長所について」）は、回答の分類における大きなグループであり、この質問では 6 つのグループに分かれた。それぞれの項目の右側の数字は当該項目の回答数を示し、上記の大きなグループの項目の右側の数字はグループ内の回答数の合計を示す。表 1 は既読表示機能の良い点の多くが送信者側にあることを示している。すなわち、メッセージを受け取った側がその送り手に既読を伝えることよりもメッセージを送った側が相手の既読を知ることの方にこの機能の利点があると多くの参加者は考えていることがわかった。

表 2 は、LINE の相手がメッセージを読んだことがわかる機能（既読表示機能）の良くない点について自由記述の回答をまとめた結果である。全回答数は 191 であった。これらの回答は 11 の大きなグループに分かれた。表 2 より、既読表示機能の良くない点は、送信者側に偏っていた良い点と比べると、送信者側と受信者側の双方に分散している。送信者の立場では、既読が表示されるまでの時間と既読が表示されてから返信が届くまでの時間に関わる点が多く挙げられた。また受信者の立場では、相手に既読が伝わる事がその後の彼らの返信行動に及ぼす影響に関わる点が多く挙げられた。更に、これらの良くない点が徐々に激化することによっていじめやトラブルに発展する可能性を挙げた参加者もいた。

次に LINE の既読無視と未読無視ではどちらがより不快であるかを二者択一で尋ねた結果を図 1 に示す。グラフ中の数字は回答数を示す。またグラフ中の「両方」は、既読無視と未読無視のどちらも不快であり高低を判断できないとして明確にどちらか一つを選ばなかった 3 名の参加者の回答を表す。図より、既読無視を選択した参加者の割合 (53.7%) の方が大きいものの、未読無視の割合 (43.9%) と大きな差は見られなかった。すなわちこの結果から、既読無視をより不快だと思ふ人も未読無視をより不快だと思ふ人も同程度いるということがわかった。

表 1. LINE の既読表示機能の良い点

回答内容	回答数
送信者側 (既読を待つ側) の既読の長所について	151
既読によって相手がメッセージを読んだことを把握できる	86
既読によって相手の安否確認になる	32
グループでメッセージを確認した人数を既読の数によって把握できる	17
既読によって相手にメッセージが届いたことを確認できる	13
既読によって相手からブロックされていないことがわかる	3
受信者側 (既読をつける側) の既読の長所について	8
既読をつけることで相手に読んだことを伝えられる	4
事務的な連絡では既読をつけることで了解を伝えられる	3
既読をつければ返信をしなくても済む	1
既読がその後のやりとりに及ぼす影響について	18
既読がつけば相手がスマートフォンを利用できる状況であることがわかる	9
既読がつけば続いて相手から返信が届くことを期待できる	7
相手に返信を催促してよいかを判断できる (既読がつけば催促できる)	1
既読がつけばやりとりを継続できる	1
既読を待つことについて	3
既読がつかない場合は他の連絡手段を考えることができる	2
既読がつくまではのんびりできる	1
既読が感情面に及ぼす影響について	7
既読がつくと安心できる	3
既読がつくとモチベーションが高まる	1
既読がつくと画面の向こう側に相手の存在を実感できる	1
既読がつくことが楽しみになる	1
深刻な話題のときには既読がつくだけで安心する	1
LINE 全般に関わる利便性について	15
LINE を使えばすぐに連絡をとれる	4
LINE はグループへの送信が簡単にできる	3
LINE はメールよりも反応がはやい	1
LINE を使えばリアルに会話をしている感じがする	1
LINE で信頼関係が深まる	1
LINE を使えば直接会わなくてもやりとりができる	1
LINE はメールよりも操作が易しい	1
LINE を使えばやりとりが気軽にできる	1
LINE はやりとりの進行がわかりやすい	1
LINE は料金がかからない	1

表 2. LINE の既読表示機能の良くない点

回答内容	回答数
既読表示後の送信者側の感情面について	59
既読がついているのに返信がないと不安になる	33
既読がついているのに返信がないと嫌われていると感じる	8
既読がついているのに返信がないとイライラする	7
既読がついているのに返信がないと悲しくなる	3
既読がついているのに返信がないと自分のメッセージ内容に問題があったのかと心配になる	3
既読がついているのに返信がないと人間不信になる	2
既読がついているのに返信がないと相手に何かあったのかと心配になる	1
既読がついているのに返信がないとメッセージを送信したことを後悔する	1
やりとりの途中で既読無視をされると不快な気持ちになる	1
未読状態での送信者側の感情面について	5
既読がついたかが気になって他のことに集中できなくなる	2
グループで使用の場合には既読が何人ついたかが気になって不安になる	1
未読の状態が続くと不安な気持ちになる	1
既読がつかないと無視されたかもしれないと不安になる	1
既読・未読に分類できない送信者側の感情面について	6
返信が遅いと不安感やイライラ感を生じさせてしまう	4
好意を抱いている人から無視されると悲しくなる	1
受信者側の感情面について	49
既読をつけたらすぐに返信しなくてはならないと焦る	35
既読をつけても返信をしないと怒られる	6
既読をつけても返信をしないことに罪悪感が生じる	3
既読をつけても返信をしないと相手を不快にさせたかもしれないと不安になる	2
既読をつけても返信ができなくて相手を不安にさせることがある	1
文章を考えていて返信が遅れたときにやりとりに間があくことに罪悪感を持つ	1
急な用事で未読のままだと不安になる	1
LINE のやりとりが要因となるトラブルについて	21
既読無視によって仲が悪くなることもある	8
既読無視や未読無視がいじめ問題につながることもある	3
既読無視をすると後々面倒なことになる	2
返信がないとトラブルが生じる可能性がある	2
LINE のグループを作って悪口を言われたり、仲間外れにされたことがあった	1
相手が（読むだけで）返信しなくてもよいと勘違いするとトラブルが生じる	1
忙しくて読めなかったときに、相手に何をしていたのかとしつこく聞かれて喧嘩になったことがある	1
既読がついているのに返信がないとき口論になったことがある	1
既読無視をした後に対面で会うとき、気まずくなる	1
やりとり中にうっかり寝過ごしてしまうと、後で言い訳や謝罪をすることになる	1

(Table 2 continues)

(Table 2 continued)

LINE による生活の変化について	2
LINE 中心の生活になってしまった	1
スマートフォンを触っている時間が増えた	1
送信者側の既読の短所（感情面以外）について	20
既読がついているのに返信がないと無視されているとわかる	10
既読がつかないとブロックされているのかと感じる	3
既読がついても相手が内容をしっかり確認していないことがある	2
すぐに既読がつくと相手がずっと待っていたのかと焦ってしまう	2
既読がつくとはやい返信を求めてしまう	1
既読がつくともっと伝えたいと次から次へと送ってしまう	1
相手が既読無視をしないように気にしているのがわかる	1
受信者側の既読の短所（感情面以外）について	12
既読をつけて返信しないと催促される	2
既読をつけたらすぐに返信しなくてはならないことが面倒である	1
既読をつけたら何か返信しなければならないと感じる	1
既読をつけて返信しないと相手に無視だと思われる	1
既読をつけたのに返信できないことの言い訳ができない	1
既読をつけたのが深夜でも、相手に起きていると思われて返信を催促される	1
既読をつけたら何分以内に返信することというルールを勝手に作られた	1
既読をつけてしまうとスマートフォンをいじっていると思われる	1
LINE をチェックする頻度が相手にわかってしまう	1
人と対面で話しているときに LINE を読むと、どちらを優先したらよいか迷ってしまう	1
自分に都合が悪いときに既読無視をしてしまう	1
既読をつけることへのためらいについて	10
相手にメッセージを読んだことがわかってしまう	3
相手に読んだことを知られたくなくても既読になってしまう	2
画面を開いているときにメッセージが届くと既読になってしまう	1
読むつもりがなくてもミスで既読をつけてしまうことがある	1
既読を恐れてむやみにメッセージを読まない人がある	1
読んでも返信ができないことがある	1
読むことはできても返信する余裕がないときに既読をつけてしまうと、相手に無視だと思われる	1
やりとりを止めることについて	5
やりとりがなかなか終わらなくなることがある	2
やりとりの途中で既読無視があると、やりとりが終わってしまう	1
やりとりを終えるきっかけが難しい	1
返信しないといけないという気持ちからだらだらとやりとりが続いてしまう	1
LINE 全般に関わる短所について	2
LINE では誤解したりされたりすることがある	1
知らない人が友達登録されていることがある	1

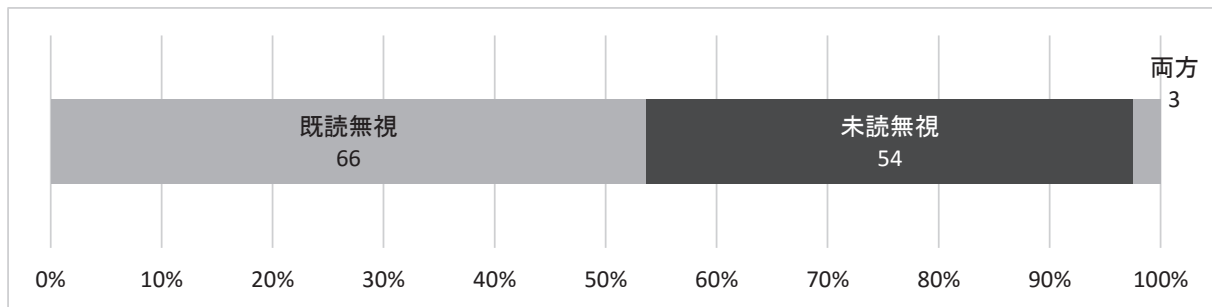


図 1. LINE の既読無視と未読無視ではどちらがより不快であるかを尋ねた結果

表 3 は、LINE の既読無視がより不快であるとした参加者の理由について、自由記述の回答をまとめた結果である。全回答数は 81 であった。これらの回答は 4 つの大きなグループに分かれた。既読無視の方がより不快だと回答した参加者の多くの理由は、自分自身が送信者側であってメッセージの受信者の既読無視を非難するものであった。すなわち既読無視は読み手による意図的な行為であり、やりとりのルールに反する行為という考え方である。同じく送信者の立場から既読無視をされた原因を、メッセージを送った自分自身の何らかの失敗にあるのではないかと捉えて悩む参加者もいることがわかった。

表 4 は、LINE の未読無視がより不快であるとした参加者の理由について、自由記述の回答をまとめた結果である。全回答数は 63 であった。これらの回答は 6 つの大きなグループに分かれた。未読無視の方がより不快だと回答した参加者の理由には、送信者側から受信者を非難するものや受信者を心配するものが多く見られた。相手を非難する理由にはスマートフォンは誰にとっても肌身離さず携帯している物であってメッセージを受け取ればすぐに見られるという認識が前提にあり、その上で自分が送ったメッセージを読まないことを相手の意図的な行為であると解釈して非難するものである。また相手を心配する理由も非難と同様の前提があり、その上でメッセージを読めない相手の状況を心配するものである。

5. 考察

LINE の既読表示の目的は、送信者にとってはメッセージを相手が見たことを把握することであり、受信者にとっては意識的ではないにせよ、メッセージを見たことを送信者に伝えることである。この目的は既読表示機能の良い点を尋ねた結果からも多くの利用者から支持されていると考えられる。しかし「既読によって相手がメッセージを読んだことを把握できる」(表 1) とまではいえないのではないだろうか。例えば「既読がついても相手が内容をしっかり確認していないことがある」(表 2) や「既読がつくだけでは相手が内容を理解したかを判断できないから」(表 3) のように既読機能に頼ることへの負の側面を挙げる利用者もいた。「画面を開いているときにメッセージが届くと既読になってしまう」(表 2)、「読むつもりがなくてもミスで既読をつけてしまうことがある」(表 2) といった回答も挙がっているように、LINE の既読表示はメッセージの送信者に対する受信者の意識的な伝達ではなく、受信者がメッセージを開くだけで自動的に送信者へ伝えられるものである。もちろん受信者がメッセージを開くときにそれを読んでいるケースが大半と考えられるが、そうでない場合もありうることに注意をする必要がある。しかし、送信者に既読が表示されたときに受信者が LINE を起動していたと考えることはできる。従って「既読によって相手の安否確認になる」(表 1) のであり、「既読がつくと画面の向こう側に相手の存在を実感できる」(表 1) のであり、「既読がつけば相手がスマートフォンを利用できる状況であることがわかる」(表 1) のである。反対に「忙しくて読めなかったときに、相手に何をしていたのかとしつこく聞かれて喧嘩になったことがある」(表 2) という回答も挙がった。更に「既読をつけてしまうとスマートフォンをいじっていると思われる」(表 2) ことや、「既読をつけたのが深夜で

も、相手に起きていると思われて返信を催促される」(表 2) ことを、既読表示機能の良くない点として挙げた利用者もいた。これらの結果から、既読表示機能は受信者がメッセージを読んだことを送信者が把握することよりも、受信者の状況を送信者が把握する助けになると考えられる。

表 3. LINE の既読無視が不快な理由

回答内容	回答数
相手の問題点(無視)を非難する理由	54
相手が意図的に無視していると感じるから	11
相手はメッセージを読んだうえで無視しているから	11
既読をつけるだけで返信をしないのは失礼なことだから	8
せめてスタンプだけでも返してくれればいいのと思うから	3
既読をつけるだけで返信をしない理由がわからないから	3
LINEは日常会話の延長なので、こちらの投げかけにその場で無視するのと同じだから	3
既読をつけても返信しないことで、自分は後回しにされていると感じるから	2
既読がつくだけでは相手が内容を理解したかを判断できないから	2
LINEをしているのなら最低限の返信ぐらいはしてほしいから	1
相手が悪意があって無視していると感じるから	1
既読をつけても返信しないのは挑戦的と感じるから	1
社会人としての常識がないと思うから	1
相手が話したくないのかなと感じるから	1
相手が返信するのを面倒だと思っていると感じるから	1
既読無視による感情面に関する理由(上記以外)	13
既読をつけるだけで返信をしないことに怒りが生じるから	5
無視されたと思って不安になるから	3
既読をつけるだけで返信がないと不安になるから	1
既読をつけるだけで返信がないと悲しくなるから	1
既読無視が度重なるとストレスが高まるから	1
既読無視されると気分が悪いから	1
既読無視が原因で人間関係が難しくなることがあるから	1
自分の問題点を反省する理由	11
相手を怒らせてしまったかと思って不安になるから	2
相手を傷つけることを書いてしまったかと考えてしまうから	2
既読無視が何度もあると相手に嫌われていると感じるから	2
相手に返信させるプレッシャーを与えていると感じるから	2
返信がないとその理由を色々と考えて心配になるから	1
返信しにくいメッセージを送ったことを反省するから	1
返信しにくいメッセージを書いた自分のセンスを疑うから	1
未読との比較に基づく理由(上記以外)	8
未読の場合なら相手が電波の入らない場所にいる等の理由が考えられるから	3
未読の場合なら既読がついたときに返信を期待できるから	2
返信できないときには未読無視をしてほしいから	1
返信できないときには既読もつけない方がまだまだから	1
未読無視と違って既読無視は言い逃れができないから	1

表 4. LINE の未読無視が不快な理由

回答内容	回答数
相手を問題点（未読無視）を非難する理由	21
相手は読む時間があるにもかかわらず意図的に読まないと思うから	6
グループでは（未読のままの人がいると）既読をつけた人に迷惑がかかるから	2
相手は返信するのが面倒で読んでないのだと思うから	4
未読が続くと相手が悪意を持って無視していると感じるから	2
SNS には投稿していても自分のメッセージは読んでないときは腹が立つ	1
スマートフォンを操作できる状況でも読まれないことがあるから	1
自分は後回しにされていると感じるから	1
他の人には返信していて自分には返信がないと複雑な気分になるから	1
相手にとっては既読無視よりは未読無視の方が気が楽だと思うから	1
相手がやりとりを終わらせたいと思っていると感じるから	1
相手に嫌われていると感じるから	1
相手を心配する理由	13
相手が読むこともできない状態にあると考えて不安が高まるから	13
自分に関わる理由	4
既読になるまで何度もスマートフォンを確認してしまうから	3
忙しい時にメッセージを送ってしまったことを相手に申し訳なく思うから	1
未読無視による感情面に関する理由（上記以外）	7
メッセージすら読まれないのはより悲しいから	4
相手にブロックされたのかもしれないと不安になるから	2
何時間たっても未読状態だと精神的ダメージが大きいから	1
既読との比較に基づく理由（上記以外）	5
既読無視ならやりとりを終えるために役立つときもあるから	2
既読がつかない操作を相手がしていることも考えられるが、せめて既読は確認したいから	1
返信することが面倒でも、せめて既読はつけてほしいから	1
無視されているという感じが既読無視よりも強いから	1
メッセージが伝わらないことに関する理由	13
相手に自分のメッセージすらも伝わっていないから	8
緊急の時に既読にもならないとどうしようもないから	1
どうしようもないから	1
内容を把握してもらえないから	1
何も伝えられないから	1
話すら聞いてもらえないと感じるから	1

既読表示によって送信者が解釈する受信者の状況は、受信者がスマートフォンを操作できる状況にあるということである。例えば通話の場合、一般的には電話をかけた側が電話を受けた側に“今お時間は大丈夫ですか？”等と尋ねることから会話を始めることが多い。電話は相手の時間に割り入っていくメディアであるためその特性を考慮して、電話をかける側は相手を気遣う。そして、相手が電話に出なかったり、電話に出ても時間の余裕がなかったりすれば、時間を置いて電話をかけ直したりファクシミリやメールに切り替えたりする。一方 LINE では、もし「既読がつかない場合は他の連絡手段を考えることができる」（表 1）けれども、既読が表示されれば相手

の状況を気遣う手続きは完了であると多くの利用者が考えていると推察される。そのため上で述べたように、深夜であっても既読が表示されれば、メッセージの送信者は相手にやりとりの態勢が整っていると受け取る。これは「既読がつけば続いて相手から返信が届くことを期待できる」(表 1) ことを意味し、「相手に返信を催促してよいかを判断できる (既読がつけば催促できる)」(表 1) のである。従って既読が表示されても相手からすぐに反応が来ないときに送信者は違和感を体験する。送信者が「既読がついているのに返信がないと不安になる・嫌われていると感じる・イライラする・悲しくなる・人間不信になる」(表 2) 理由は、例えば「既読をつけるだけで返信をしないのは失礼なことだから」(表 3) であり、「既読をつけるだけで返信をしない理由がわからないから」(表 3) であり、「社会人としての常識がないと思うから」(表 3) である。すなわち「LINE は日常会話の延長なので、こちらの投げかけにその場で無視するのと同じだから」(表 3)、「既読にした」にもかかわらず返信しない受信者の態度を LINE のやりとりにおいて非常識だと考えるのである。中には「相手が悪意があって (既読) 無視していると感じるから」(表 3) や「相手が意図的に (既読) 無視していると感じるから」(表 3)、「既読をつけても返信しないことで、自分は後回しにされていると感じるから」(表 3) といった受信者の悪意に基づいた態度だと感じる利用者もいた。送信者から見た既読表示機能は「既読がつくと安心できる」(表 1) ことや「既読がつくとモチベーションが高まる」(表 1) こと等のポジティブな感情を喚起させる要因を持つ一方で、その後の返信とも深く関わっていて、返信が遅かったりなかったりするとネガティブな感情を喚起させる要因にもなっていると考えられる。

受信者の視点による既読表示機能の評価には、表 1 と表 2 の回答の分布を見ても明らかなように、良くない点が多い。そしてほとんどの評価が既読とその後の返信に関するものであった。LINE のやりとりをしているうちに、例えば「既読をつけても返信をしないと怒られる」(表 2) ことや「既読をつけて返信しないと催促される」(表 2) こと、「既読をつけて返信しないと相手に無視だと思われる」(表 2) こと等を経験して、メッセージを受け取ったときに「既読をつけたのに返信できないことの言い訳ができない」(表 2) という信念を持つようになった利用者も少なくないのかもしれない。その結果、「既読をつけたら何か返信しなければならないと感じる」(表 2) ようになり、「既読をつけたらすぐに返信しなくてはならないと焦る」(表 2) ようになったと考えられる。更に「既読をつけても返信をしないことに罪悪感が生じる」(表 2) ことや「既読をつけても返信をしないと相手を不快にさせたかもしれないと不安になる」(表 2) こと等、相手の感情を気にする利用者もいた。以上のように、既読表示によって受信者には返信へのプレッシャーが生じ、また送信者への気遣いもあり、他方では「既読をつけたらすぐに返信しなくてはならないことが面倒である」(表 2) と返信を負担に感じることもあっても、メッセージを見たら速い返信をしているのだと考えられる。携帯メールのやりとりにおける返信のタイミングについて日本の大学生を対象にして調べた Kato, et al. (2012) は、相手の感情や自分自身の感情を操作する (Kato, et al. (2010) はこれらを感情方略と名付けた) ために返信をする側 (メッセージの受信者) は返信のタイミングを工夫していることに注目して、返信を意図的に遅らせることがあることを明らかにした。しかし返信を意図的に遅らせる場面についてはばらつきがあり、例えば相手が自分 (メッセージの受信者で返信をする側) に対して怒っているとき、相手に反省を伝えるために速く返信をするという利用者と、相手の怒りがおさまるのを待つために意図的に返信を遅らせるという利用者がある等、大きく回答が分かれた場面も複数あった (Kato, et al., 2012)。これらの結果について Kato, et al. (2012) は、基本的に携帯メールのやりとりでは速いスピードが求められているとし、その上で返信を遅らせることにより (原則としてトラブルを防ぐため) 相手や自分自身の感情を操作しようとする場面が見られたが、これらの場面には個人差があるために速い返信を求める利用者とそうでない利用者とのやりとりではトラブルに発展する可能性が懸念されると考察した。更に Kato and Kato (2015) は、返信を受け取る側 (メッセージの送信者) が携帯メールにおいて速いスピードの返信を求める場面と遅くてもよいと考える場面について調べた。その結

果、返信を待つ送信者にとっても相手や自分自身のおかれた状況や自身が送ったメッセージの内容によっては返信が遅くてもよいと考えていることが示された (Kato & Kato, 2015)。携帯メールコミュニケーションを検討したこれらの先行研究では、やりとりのスピードを意図的に遅らせることを送受信双方の側で認めている部分があることを示しているとも考えられる。他方 LINE のやりとりに検討した本研究では、返信が遅くてもよい場面を直接的に利用者に尋ねてはいないものの、遅い返信を受け入れることを示唆した回答は見当たらなかった。この違いは調査の時期も影響しているかもしれないが、それ以上に LINE が持つ既読表示機能の影響が大きいと考えられる。すなわち既読表示機能は、やりとりのスピードを携帯メール以上に速めることに寄与していると考えられる。

既読表示機能によって LINE では返信のスピードが速まるだけでなく、「既読がつけばやりとりを継続できる」(表 1) や「既読がつくともっと伝えたいと次から次へと送ってしまう」(表 2) といった回答も挙がっているように、やりとりが長く続くことも多くなると考えられる。やりとりのスピードが速くなってそれが継続すると会話のようになる。とはいえテキストベースのコミュニケーションは非同期のメディアであり、対面や電話のようにメッセージが音声でリアルタイムに伝わるわけではなく、作成し終わったメッセージごとに相手に送られる。そのため「文章を考えていて返信が遅れたときにやりとりに間があくことに罪悪感を持つ」(表 2) や「やりとり中にうっかり寝過ごしてしまうと、後で言い訳や謝罪をすることになる」(表 2) と、やりとりを中断させてしまうことを気にする利用者もいた。その結果、「やりとりがなかなか終わらなくなることもある」(表 2) や「やりとりを終えるきっかけが難しい」(表 2) 等、長く続くやりとりに困惑する利用者が現れるのである。加藤ら (2013) は、携帯メールのコミュニケーションで長く続くやりとりを終わらせる方法を大学生に調査した結果、最も多かった方法が相手に就寝を伝えることであったと報告した。特に若者同士の携帯電話やスマートフォンを使ったプライベートのやりとりは就寝前に行われていることが多い (総務省, 2014) ため、就寝がやりとりを終わらせる理由として成立するのであろう。しかし、布団に入ってから眠りに落ちるまでの間にスマートフォンが着信を知らせれば、あるいは着信によって眠りから覚めたとき、届いたメッセージをついつい開いてしまうことがあるかもしれない。そうすれば既読が伝えられたそのメッセージの送信者は相手がまだ起きていると判断して、結局やりとりが新たに始まってしまう恐れもある。既読が伝わってしまったら「返信しないといけないという気持ちからだらだらとやりとりが続いてしまう」(表 2) が、他方で「既読無視ならやりとりを終えるために役立つときもあるから」(表 4) や「やりとりの途中で既読無視があると、やりとりが終わってしまう」(表 2) という回答もある。しかし多くの利用者にとって既読無視は気が引ける行為であろう。これまで見てきたように、既読表示は受信者がスマートフォンを操作できる状況であることを送信者に伝え、送信者が早い返信を求める理由になり、速い返信を求められているという受信者のプレッシャーにもなっている。すなわち既読表示が長く続くやりとりをより促進させていると考えられる。メッセージが届いたとき (たとえそれが深夜であっても)、スマートフォンを操作できる状況であればメッセージを開いてしまうのは心理的に避けたいが、長く続くやりとりを終えたい場合や新たにやりとりを始めたくない場合等には、それが深夜なら“これから寝ます”や“もう寝ています”等と、やりとりを続けられないことをきちんと言葉のメッセージで伝えることが、既読表示機能を持つ LINE のやりとりでは特に必要なのかもしれない。

メッセージを開くこととそれに返信することが LINE のやりとりでは切り離せない行為であると多くの利用者に認識されていることを本研究は示唆する。それではメッセージの着信があってもすぐにメッセージを開かないこと (未読状態であり、当然返信もない) を利用者はどう考えているのであろうか。既読無視と未読無視のどちらがより不快であるかを尋ねた結果は、回答が両者に分かれたことを示した (図 1)。既読無視の方が不快であると回答した利用者の中には「未読の場合なら相手が電波の入らない場所にいる等の理由が考えられるから」(表 3) と、受信者の状

況を推測して仕方がないと判断する利用者もいた。自分が送ったメッセージを相手はその時点では見られない状況にあるが、相手がメッセージを見られる状況になれば返信を送ってくれるだろう、すなわち「未読の場合なら既読がついたときに返信を期待できるから」(表 3) と考えるのである。しかしメッセージの着信を知った受信者はメッセージをさっと確認することはできても、返信はできない場合もある。それに対しては、「返信できないときには未読無視をしてほしいから」(表 3) や「返信できないときには既読もつけない方がまだましだから」(表 3) といった回答が、既読無視の方が不快であると回答した利用者から挙がった。これは「未読無視と違って既読無視は言い逃れができないから」(表 3)、つまり、上述のように既読と返信は切り離せないという認識が利用者にあるからだと考えられる。一方、未読無視の方が不快であると回答した利用者の中には「相手を読むこともできない状態にあると考えて不安が高まるから」(表 4) と、相手のおかれた状況を心配する利用者が多くいた。これは LINE の既読表示が相手の安否確認に役立つという考え方に即した回答であるが、加えてこれはメッセージを送信してから既読の表示までに時間がかからないのが通常であるという前提の上での不安と考えられる。そのため「既読がついたかが気になって他のことに集中できなくなる」(表 2) ののである。相手の外的な要因すなわち相手がスマートフォンを操作できない状況を未読の理由と考えるのではなく、相手の内的な要因すなわち相手が意図的に未読のままにしていると考えられる利用者もいた。例えば「相手は読む時間があるにもかかわらず意図的に読まないと思うから」(表 4) や「未読が続くと相手が悪意を持って無視していると感じるから」(表 4)、「既読がつかないと無視されたかもしれないと不安になる」(表 2) のである。そして相手が未読のままにしている理由を「相手は返信するのが面倒で読んでないのだと思うから」(表 4) と回答した利用者もいた。未読状態のうちは受信者は返信のプレッシャーから逃れられるため「相手にとっては既読無視よりは未読無視の方が気が楽だと思うから」(表 4) と、送信者の立場から相手の気持ちを推測する利用者もいた。このような利用者の中には「返信することが面倒でも、せめて既読はつけてほしいから」(表 4) と、未読よりも既読の状態返信を待たされる方が良くとする利用者もいるようである。更に「(LINE 以外の) SNS には投稿していても自分のメッセージは読んでないときは腹が立つ」(表 4) や「他の人には返信していて自分には返信がないと複雑な気分になるから」(表 4) 等、すなわち相手が「スマートフォンを操作できる状況でも読まれないことがあるから」(表 4)、そのような場合に「自分は後回しにされていると感じるから」(表 4)、未読無視をより不快であるとする利用者もいた。現在の LINE 利用者の中には LINE 内で複数のやりとりを並行して行っている利用者や LINE 以外にも様々な SNS を使っている利用者がいることを示す回答であり、これはいわゆる“居留守”を使うことが難しい時代であることを示す結果でもありと考えられる。

現在 LINE は若者の間で最も利用されているテキストベースのコミュニケーションであり、本研究の調査でも「LINE を使えばやりとりが気軽にできる」(表 1)、「LINE はメールよりも反応がはやい」(表 1)、「LINE を使えばすぐに連絡をとれる」(表 1)、「LINE で信頼関係が深まる」(表 1) 等の LINE 全般に関する良い点が挙げられた。しかし特に LINE の既読表示機能によって利用者に生じる様々な負担も今回の調査から強く示されたといえる。「(未読状態の間) 既読になるまで何度もスマートフォンを確認してしまうから」(表 4) や「スマートフォンを触っている時間が増えた」(表 2)、「LINE 中心の生活になってしまった」(表 2) といった“LINE 依存症”を思わせる回答もあった。授業中にスマートフォンに電話やテキストメッセージ (LINE も含む) の着信があったときの反応について大学生を対象に調査をした Chida, et al. (2016) によると、テキストメッセージの着信時にはメッセージの内容を確認して必要であればそれに返信をする傾向が多く的大学生にあり、電話の着信時にはメディアを代えてテキストメッセージで返信をする傾向があることを示した。なおテキストメッセージの着信時にメッセージを読むだけで返信まではしないと回答した大学生は少数であった (Chida, et al., 2016)。本研究でも「人と対面で話しているときに LINE を読むと、どちらを優先したらよいか迷ってしまう」(表 2) という回答があり、

本来どちらを優先するべきか常識的にはわかるはずの場面（授業中、対面での会話中等）でさえ、既読表示機能が返信行動を強く促すことを表した結果であるといえる。また「既読無視によって仲が悪くなることがある」（表 2）、「返信がないとトラブルが生じる可能性がある」（表 2）、「既読がついているのに返信がないとき口論になったことがある」（表 2）、「既読無視をした後に対面で会うとき、気まずくなる」（表 2）、「既読無視をすると後々面倒なことになる」（表 2）といったトラブルや、「既読無視や未読無視がいじめ問題につながることもある」（表 2）という最悪の結末に既読表示機能が関わる可能性がありうる。LINE が普及した今日において、LINE 利用者が既読表示機能の役割をどのように捉えることが適切であるかを検討することは急務であると考えられる。

6. おわりに

世界各国で主に使用されているインスタントメッセージングのアプリケーションは WhatsApp や Facebook メッセージングであり、LINE は日本ほどには海外で利用されていないため、LINE に関する基礎的な研究はほとんどない。そのため本研究では、今後の LINE に関わる研究の基礎資料として役立つことを目的にして、LINE を利用する大学生 123 名を対象にした LINE の既読表示機能に関するアンケート調査を実施した。例えば本研究で得られた自由記述の回答をリッカート尺度の質問項目にしたアンケート調査を行うことで、より詳しい数量的な分析を行うことが可能になる。また本研究では返信のスピードについて論じてきたが具体的な時間は不明である。Kato et al. (2016) は LINE の返信でどのぐらい待つことによって不快感情が生じるのかをアンケートで調べた結果、正午に送信したメッセージに対して、既読状態では就寝まで待つと、また未読状態では翌朝まで待つと不快感情が生じることを示した（全回答者の評定値の中央値による）。しかし LINE 利用者 9 名に既読無視についてインタビューを行った種村 (2015) によれば、既読無視と判断する待ち時間は相手によって異なる。どの時点で無視となり、それによって不快感情が生じるのかについては、今後継続的な研究が必要である。最後に、本研究では、LINE のグループやスタンプについては考察しなかった。上記の種村 (2015) は、グループに送られたメッセージには返信しにくいことやスタンプでやりとりを終えることを示唆するインタビュー結果も報告している。LINE の特徴としてこれらについても検討していく必要がある。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 24501220 及び 15K01095 の助成を受けたものです。

参考文献

- Chida, K., Kato, Y., & Kato, S. (2016). Student response behavior to six types of caller/sender when smartphones receive a call or text message during university lectures. *Proceedings of 12th International Conference on Mobile Learning 2016*, in printing.
- Igarashi, T., Motoyoshi, T., Takai, J., & Yoshida, T. (2008). No mobile, no life: Self-perception and text-message dependency among Japanese high school students. *Computers in Human Behavior*, 24(5), 2311-2324.
- 加藤栞 (2013). 大学生を対象にした Line に関する性差～携帯メールとの比較を通して～2012年度 相模女子大学メディア情報学科 加藤由樹ゼミ卒業研究論文集, 127-139.
- Kato, Y. (2015). A generation gap on mobile phone communication : the sense of discomfort experienced by digital natives when communicating with digital immigrants. *Journal of Information and Media Studies* (メディア情報研究), 1, 31-44.

- Kato, Y., & Kato, S. (2015). Reply speed to mobile text messages among Japanese college students: When a quick reply is preferred and a late reply is acceptable. *Computers in Human Behavior*, 44, 209-219.
- Kato, Y., & Kato, S. (2016a). Mobile phone use during class at a Japanese women's college. In M. N. Yildiz & J. Keengwe (Eds.), *Handbook of Research on Media Literacy in the Digital Age*, (pp.436-455). Hershey, PA: IGI Global.
- Kato, Y., & Kato, S. (2016b). Mobile phone placement during lectures and dependency on LINE and text messaging: Survey of students at a women's university in Japan. *Journal of Socio-Informatics*, 8(1), 28-40.
- Kato, Y., Kato, S., & Chida, K. (2012). Reply timing and emotional strategy in mobile text communications of Japanese young people: replies to messages conveying four different emotions. In S. D. Long (Ed.), *Virtual Work and Human Interaction Research*, (pp.99-114). Hershey, PA: IGI Global.
- Kato, Y., Kato, S., & Chida, K. (2016). Negative feelings when waiting for a LINE response and degree of SNS dependency: Focusing on read status. *Proceedings of 14th International Conference on e-Society 2016*, in printing.
- 加藤由樹, 加藤尚吾, 窪田尚, 立野貴之 (2013). テキストコミュニケーションにおいて長く続くやりとりを終えるためのメッセージ内容の工夫に関する調査. *教育情報研究*, 29(1), 21-30.
- Kato, Y., Kato, S., Scott, D. J., & Sato, K. (2010). Patterns of emotional transmission in Japanese young people's text-based communication in four basic emotional situations. *International Journal on E-Learning*, 9(2), 203-227.
- 松下慶太 (2007). てゅーか、メール私語—大人の知らない机の下のケータイ・コミュニケーション. じゃこめてい出版, 東京.
- 岡田尊司 (2014). インターネット・ゲーム依存症 ネットゲからスマホまで. 東京, 文藝春秋.
- 岡本香, 石崎達也 (2015). 大学生の LINE の既読スルーに関する探索的研究. *日本社会心理学会 2015 年度第 56 回大会発表論文集*, 174.
- 総務省 (2014). 高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査報告書. 東京, 総務省. Retrieved July 17, 2015, from http://www.soumu.go.jp/main_content/000302914.pdf
- 総務省 (2015). 平成 27 年版情報通信白書. 東京, 総務省. Retrieved January 4, 2015, from <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/pdf/index.html>
- 立野貴之, 加藤尚吾, 加藤由樹 (2012). 大学生におけるケータイメールの顔文字と絵文字の利用傾向に関する調査. *日本教育工学会研究会報告集, JSET12-4*, 119-122.
- 立野貴之, 加藤尚吾, 加藤由樹 (2013a). 大学生の授業中のケータイ利用とその意識. *日本教育工学会研究会報告集, JSET13-1*, 247-250.
- 立野貴之, 加藤由樹, 加藤尚吾 (2013b). 大学生の授業中のケータイ利用に関する調査. *日本教育工学会第 28 回全国大会講演論文集*, 815-816.
- 種村剛 (2015). LINE の既読無視はなぜ非難されるのか: 大学 1 年生へのアンケート調査を通じて. *自然・人間・社会: 関東学院大学経済学部総合学術論叢* 58, 73-105.
- Tyler, J. R. & Tang, J. C. (2003). When can I expect an email response? A study of rhythms in email usage. *Proceedings of the Eighth European Conference on Computer Supported Cooperative Work (ECSCW2003)*, 239-258.
- 吉田俊和, 高井次郎, 元吉忠寛, 五十嵐祐 (2005). インターネット依存および携帯メール依存のメカニズムの検討-認知-行動モデルの観点から-. 平成 15 年度電気通信普及財団研究調査報告書, 176-183.